

巻頭言—知的サービスへ

生田目 崇^{†1}

本巻は昨年度発行開始された本学会の論文誌の第2巻であり、「知的データサイエンス」と称した特集を組んだ。データサイエンスに関する期待は近年ますます高まっているように思う。その反面で、期待先行で一体何ができて何ができないのか、また何がしたいのかについて整理できていない面も多いように思われる。本学会の社会へのプレゼンスはまだ未成熟であり、その発信力も弱いことは自認しているが、データサイエンスへの一石を投じたいという思いの元で本特集を企画した。

本特集は3編から構成される。最初は、慶應義塾大学理工学部の櫻井彰人先生に、機械学習・人工知能の研究の系譜や今後の期待について語っていただいた。櫻井先生は東京大学大学院を修了後、日立製作所の研究所を経て、慶應義塾大学において教鞭をとられてきた。本年3月に定年退官されるとのことで、指導学生であった大竹恒平氏（現、中央大学、4月より東海大学に赴任）にインタビューを依頼し、インタビュー並びに文章構成をお願いした。現在の人工知能ブームに至るまでの変遷や現状に加えて、今後への示唆・警鐘に至るまで、先生の見識の広さが分かる記事となっている。特に、現在ある種誤解されている人工知能について大変わかりやすく整理されているので是非一読いただきたい。

2編目は、東京都市大学の岡先生にウェアラブルデバイスを対象にデータサイエンスの周辺に関してまとめていただいた。数年前から、様々なウェアラブルデバイスが登場し、もちろん情報通信機器として広く用いられている。それとともに、ヘルスケアビジネスなどにおけるデータ収集デバイスとしても有望視されており、新たなサービス展開

が行われるようになってきている。こうした、現状や期待について論じられている。ウェアラブルデバイスについては、ウォッチタイプやグラスタイプなど様々な形態のものがある。すべてが順風満帆とはいえないものの、次々と新製品が登場することからも、今後市場拡大が見込まれる。成否のカギはデバイスで収集されるデータをどのように料理し新たな（知的な）サービスに結びつけられるにかかっていよう。

3編目は、実際にデータサイエンスをビジネス展開している、株式会社システム計画研究所 (isp) の奥野氏、新谷氏に農業を対象としたデータ活用、データ分析の事例を紹介いただいた。近年では農業においても様々なデータ活用が行われている。isp社はソフトウェアやシステム開発の他、AIやデータ分析コンサルタントなど広くデータを扱う事業を行っており、特にデータ分析に関しては定量データから画像といった非定型データまでを扱う先進的な企業である。本稿では、モデル分析において、大変丁寧なプロセスを経ていることが分かるが、データを入れればすぐさま気の利いた結果やサービスが得られる！と過度に期待されている現在のAIブームに対して、実際は人間が真摯にデータに向き合う必要があることが理解できる。

データサイエンス領域の研究や活用事例は多岐にわたり、本特集はほんのその一部を紹介したに過ぎない。今後機会があれば、新たな成果や提言などを行っていくことを考えたい。本学会では、データサイエンスに関する様々な研究や実社会における適用をおこなっており、下記にあるような研究部会も含めて活動している。ご興味ある方はぜひ本学会にご入会いただくと幸いである。

本学会の研究部会一覧

人材教育研究部会（主査：中野 光義：(株) サン・パートナーズ）

オープンデータ活用研究部会（主査：水野 信也：静岡理科大学）

人工知能研究部会（主査：桑田 喜隆：室蘭工業大学）

データ解析研究部会（主査：稗田 隆：岡山大学）

情報セキュリティ研究部会（主査：森 邦彦：鹿児島大学）

^{†1} 中央大学（連絡先：nama@indsys.chuo-u.ac.jp）